

【作文の部】最優秀賞(国土交通大臣賞)

神奈川県 鎌倉市立山崎小学校 6年 佐藤 菜花(さとうなのか)
「土砂災害の少ない鎌倉を目指して」

7月28日、山口県・島根県で土石流発生。8月9日、岩手県・秋田県で土石流・洪水・土砂崩れ発生...今年の夏は全国的に集中豪雨による土砂災害が多い。近年、日本だけでなく、世界のあちこちでも土砂災害や洪水が増えているのは、地球温暖化による集中豪雨や台風の発生件数の増加が原因の一つである、と以前ニュースで聞いた。確かに最近、私の住んでいる鎌倉でもびっくりするくらい激しい雨が降ることがある。私は東北の土砂崩れの新聞記事を読みながら、「鎌倉は大丈夫だろうか」と不安な気持ちになった。

私は母に、鎌倉は土砂災害の起こりやすい所なのかと聞いてみた。すると母は、鎌倉市が配布した土砂災害ハザードマップを出してきてこう言った。「この茶色い部分が『土砂災害警戒区域』だって。うちは大丈夫だけれど、山崎小学校の学区には茶色い部分が結構あるね...。お父さんもお母さんも鎌倉出身じゃないからよく分からないけれど、昔から鎌倉は土砂災害が多いのかなあ？」

母の言葉で、私の探究心に火が付き、すぐにインターネットや図書館の本で鎌倉の土砂災害について調べてみた。すると、鎌倉市のほとんどの地域が昔、海底だったのが隆起してできたところであるため、もろい砂岩質の土壌であることが分かった。

では、昔から大雨のたびに鎌倉は土砂災害が起きていたのだろうか。昔のことは自分で調べてもよく分からなかったので、ご近所の70代の川上さんという方に話をうかがうことにした。川上さんは先祖代々鎌倉に住んでおられ、山崎小の総合的な学習の時間などにもよく鎌倉の自然について話をしてくださる博識な方だ。

川上さんによると、鎌倉の土砂災害は昔に比べてずい分と増えたそうだ。やはり、集中豪雨が増えたせいもあるが、川上さんの考える、土砂災害の起こる原因は、「森林の手入れをしなくなったこと」だという。昔は調理する時、暖まりたい時、全てまきを使っていた。そのまきは間ばつ材と呼ばれる木を用いていた。間ばつとは、木と木の間に、ある程度距離を保たせるように木を定期的に切ることで、これにより、木が健やかに成長し、地中深く根を張り地盤を支えてくれるのだそうだ。間ばつをせず放っておくと、木どうしが栄養や日光を取り合って、どの木も十分に成長せず、大雨が降ると簡単に流されてしまう。鎌倉の森は60年も放っておかれたせいで、木の種類もすっかり変わり、昔いた生物がいなくなったり少なくなったりしてしまった、と川上さんはとても悲しそうにおっしゃっていた。

私は川上さんの話を聞いて、自分の考えが間違っていたことに気づいた。私は今まで土砂災害が起こるのは、その土地の土質や集中豪雨が原因だから、温暖化を食い止めることくらいしか対策はない、と思っていた。しかし、原因は他にも考えられることが分かった。また、私は今まで「鎌倉は緑が多い」と言われるのをなんだか誇らしく思っていたのだが、緑が多いほど土砂災害に強い森になる、というわけではないことも知った。そして森は、手を加えないで放っておくのではなく、きちんと手入れをしていくことが土砂災害に強い環境づくりにもなるし、生態系を守ることもつながる、ということも学んだ。

今回の土砂災害の勉強を通し、私は、自然について無関心でいると、災害をひきおこし、山をこわし、生態系をこわし、やがて人間社会をも破壊してしまう可能性があると思った。だから、この鎌倉を守るために自然に興味を持ち、どうすれば良いか考える努力をしていくことが必要だと思う。具体的には、どの種類の木が土砂に強いのか、どんな手入れをしていったら良いのか、また、土砂災害を引き起こす原因として、他にどんなものがありどんな対策があるのかなど、これからもっと勉強して、鎌倉を土砂災害の少ないまちにしていきたいと思う。

鹿児島県 阿久根市立大川中学校 2年 大田 和(おおたなごみ)
「故郷と共に生きる」

雄大な東シナ海に沈む夕日は、キラキラと輝き、今日も私たちの町を赤く染めています。夏が近づくと、川にはホタルが舞い、山は青々と茂り緑が鮮やかです。人々の心を和ませる風景が広がるここは、私の故郷大川です。私は、ここ大川で生まれ育ちました。私の両親、祖父母、先祖代々、この地に生きています。この美しい故郷大川に、信じられない光景が広がった42年前。北薩地方を中心に甚大な被害が出た集中豪雨があったのです。

昭和46年7月23日。その日の雨は今まで経験したことのない土砂降り、家のかわらがはずれているわけではないのに、雨漏りするほど、ひどかったそうです。阿久根市では、23日午後5時から6時の1時間に106ミリという、当時の県本土最大の降雨量を記録しました。この激しい雨で、大川の尻無集落の山の土砂が一気に崩れ、家が壊され、流されました。当時の写真を見ると、あまりの悲惨な光景に思わず息のみます。

「お父さんの同級生も、家が流されて亡くなった。かわいそうで悲しかったよ。その子は優しい子だった。忘れられないよ。」

父の言葉を聞いて、私は絶句しました。まさかの父の同級生が亡くなっていたなんて。その一家は6人が生き埋めになり、2人亡くなったとのこと。父は当時10歳、小学校4年生です。亡くなった父の同級生も同じ年。この世に生まれてわずか10年しか生きられなかったなんて。土砂にのみこまれて、苦しかっただろう。私は胸が押しつぶされそうになりました。

悪夢のような時が過ぎ、雨が少しやんでから、父と母、祖母は、尻無川を見に行っただけです。そのときの川の様子は、日頃見ていたキラキラと水面が光る、美しいせせらぎの川と全く違いました。雨がやんでいても、茶色に濁り、ゴウゴウとずさまじい勢いで流れていました。道路は水があふれ、水浸し。堤防は壊れ、行方不明の方を探している姿もあつたようです。42年前の、たった1日の出来事でした。

さて、阿久根市で、現在「防災マップ」が各家庭に配付されています。この42年前の話を知って、その「防災マップ」をもう一度開いてみました。私は、背筋が凍るような思いにかられました。それは、私の住んでいる尻無集落が、土石流発生危険渓流があり、土砂災害特別区域、いわゆる「レッドゾーン」になっているからです。私が毎日生活しているところが、危険な場所であつた……。不安と怖さでいっぱいになりました。あれから42年間、大きな災害もなかったことが幸せであつたと思うと同時に、土砂災害が起こらないよう、集中豪雨が降らないよう願うばかりです。

しかし、願うだけでいいのでしょうか。現在の地球の気象状況では、いつ集中豪雨が発生するか予測はできません。私は、災害が起こったときに、どのような行動をとればいいのか、42年前に悲しみを体験した祖母と父と母と一緒に一生懸命考えました。そこで確認したのは次のようなことです。日頃から危険な箇所を確認すること、避難場所を確認すること、「自分たちは大丈夫」という思いを決してもたないこと。そして、近所の方々や地域の方々や日頃からいつも支え合って生きていくことです。日頃から付き合いがなければ、いざという時に、本当に助け合って生きていくことができないと思います。

42年前の集中豪雨。自然豊かな故郷大川の自然。また、牙をむいて、人の命を奪ってしまう自然。どちらも同じ自然です。私にとって大好きな大川の自然に対して畏敬の念をもち、地域の人々と支え合って生きていくこと。「故郷と共に生きる」ことの大切さを私は今、しみじみと感じています。